

長寿医療研究開発費 2025年度 総括研究報告

高齢者の生活の質向上に繋げるケアモデルに関する研究（25－28）

主任研究者 松浦 悠子 国立長寿医療研究センター 看護部（副看護師長）

研究要旨

日本は超高齢社会を迎え、医療や介護を必要とする高齢者は今後も増加すると予測されている。これに伴い、高齢者の健康管理や生活の質（QOL）を向上させる老年看護および介護の重要性は一層高まっている。一方で、人口減少による労働人口の縮小により、看護・介護分野では慢性的な人材不足が深刻化し、現場におけるケアの質の低下が懸念されている。また、介護職の多くは地域の介護施設で勤務しており、医療的ケアが中心となる病院勤務を敬遠する傾向がみられる。このような社会的背景は、地域包括ケアシステムの推進においても課題となっており、高齢者がその人らしい生活を継続できるよう支援するためには、看護と介護の双方の質を総合的に向上させる必要がある。本研究は、看護職・介護職・患者および家族への多面的な介入を通じて、高齢者の生活の質向上に資する看護・介護モデルを構築することを目的とし、地域包括ケアシステムにおける質の高いケア提供の実現に寄与することを目指す。

主任研究者

松浦 悠子 国立長寿医療研究センター 看護部（副看護師長）

分担研究者

近藤 和泉 国立長寿医療研究センター 副院長室（客員研究員）

瀨瀬 伸子 国立長寿医療研究センター 看護部（看護部長）

萩原 淳子 国立長寿医療研究センター 看護部（副看護師長）

栗山 恵美 国立長寿医療研究センター 看護部（介護福祉士）

サブレ森田さゆり 国立長寿医療研究センター 代謝内科部（外来研究員）

笠松里佳子 国立長寿医療研究センター 看護部（看護師）

岩下 彩 国立長寿医療研究センター 看護部（副看護師長）

宮本 彩香 国立長寿医療研究センター 看護部（看護師）

斎藤 佑輔 国立長寿医療研究センター 看護部（看護師）

後藤 文宏 国立長寿医療研究センター 看護部（看護師長）

木ノ下智康 国立長寿医療研究センター 臨床研究支援部（臨床研究教育研修室長）

燕 真理子 国立長寿医療研究センター 看護部（副看護部長）

佐久間直美 国立長寿医療研究センター 看護部（看護師長）

A. 研究目的

1. 回復期リハビリテーション病棟において求められる介護福祉士の専門性を明らかにし、その専門性を客観的に評価できる尺度を開発する。これにより、介護福祉士の役割、専門性の可視化を図る。
2. 地域包括ケア病棟において、「人生 100 年これからゲーム」を用いた介入が患者のアドバンス・ケア・プランニング（ACP）を考える契機となり得るかを検討するとともに、患者の思いが家族および医療・介護関係者と共有され、意識の変容につながるかを検証し、さらに患者の思いを家族や医療者へつなぐ具体的な方法を明らかにする。
3. 高齢患者が退院後にどのような生活を望むかというアドバンス・ケア・プランニング（ACP）に基づく希望や思いを確認し、その希望・思いを基盤として複数の選択肢を提示する退院指導が、患者にどのような効果をもたらすかを明らかにする。

B. 研究方法

1. 回復期リハビリテーション病棟における介護福祉士の専門性に関する文献検討を行い、専門性構造に関する理論的枠組みを整理し、研究課題を明確化する。文献検索によって抽出された専門性構造を基盤として質問紙を作成し、回復期リハビリテーション病棟に勤務する介護福祉士を対象に、無記名自記式質問紙調査を実施する。
2. 地域包括ケア病棟において、「人生 100 年これからゲーム」を用いた介入を実施し、その有効性を検証する。ゲームを通じて患者がアドバンス・ケア・プランニング（ACP）について考える契機となったかを評価し、次に、患者の思いが家族や医療・介護関係者と共有され、意識変容につながったかを検討する。形成された患者の思いを家族および医療者へ効果的につなぐ方法について分析し、具体的な支援方策を検討する。
3. 当センターにおいて 2 回以上の入院歴を有する患者数を診療科別および病棟別に集計し、各病棟で実施されている退院指導の内容について現状調査を行い、研究対象となる患者を明確化する。対象患者には、退院に向けて必要と考える退院指導内容を、設定した 5 項目の中から自身で選択してもらい、その選択内容に基づき病棟看護師が退院指導を実施する。退院指導を受けた患者を対象として、指導前および退院 1 か月後の健康関連 QOL 調査票の得点を収集し、各項目について比較検討する。

（倫理面への配慮）

研究の実施にあたり、倫理については、人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針等にそって実施する。また、国立長寿医療研究センターの倫理・利益相反委員会

の承認を受けて実施する。この研究において利益相反はない。

C. 研究結果

1. 「介護福祉士」「専門性」をキーワードとして文献検索を行い、介護福祉士の専門性として4カテゴリー（①日常生活自立に関する知識と技術 ②その人らしい生活を尊重する倫理観と判断力 ③支援における多職種連携 ④連携における介護福祉士の自律性）が抽出された。文献検討で得られた専門性構造を基盤として、回復期リハビリテーション病棟に勤務する介護福祉士を対象とした質問紙原案を作成し、今後の全国調査に向けて、調査項目数や回答負担の観点から内容の精査を進めた。
2. 地域包括ケア病棟における「人生100年これからゲーム」を用いたアドバンス・ケア・プランニング（ACP）導入支援のパイロットスタディを実施し、患者の思いを家族と共有する手段が課題として示唆された。この課題を踏まえ、次に家族と患者が共に参加する形でACPカードゲームを実施し、ACP導入支援プロセスについて質的分析を行った。RACP尺度を用いてカードゲーム実施前と1か月後の評価を行い、結果については現在分析中である。
3. 当センターに2回以上の入院歴がある患者の現状調査から、慢性心不全で2回以上入院した患者を研究対象として研究計画を策定、倫理・利益相反委員会の審査を受けたが「差し戻し」となり、再申請のため研究計画等を見直していた。2026年度の実施に向け、倫理審査申請（再申請）のため計画書を修正している。

D. 考察と結論

本研究では、看護職・介護職・患者および家族への多面的な介入を通じて、高齢者の生活の質向上に資する看護・介護モデルの構築を目指した。介護福祉士の専門性に関する文献検討の結果、介護福祉士の専門性は「自立支援」を中心概念とし、日常生活自立に関する知識と技術、倫理観と判断力、多職種連携、専門職としての自律性といった多面的構造を有することが明らかとなった。これらの専門性は、回復期リハビリテーション病棟においても重要な役割を担う可能性が示され、今後は実践能力尺度の構成概念妥当性の検証や教育・職能開発プログラムの構築へつなげていく必要がある。

さらに、地域包括ケア病棟におけるACP導入支援の検討では、「人生100年これからゲーム」を用いた介入が、患者が自身の価値観や希望を整理し、言語化しにくい思いを可視化する手段として有用である可能性が示唆された。また、家族と共にカードゲームを実施することで、患者の思いの初認識・再認識が促され、相互理解を深める場となり得ることも明らかとなった。一方で、家族関係や価値観によってはACPへの躊躇や戸惑いが生じる場合もあり、支援者による丁寧な関わりや心理的配慮が必要であることも

示された。

これらの成果をさらに発展させ、3つの研究の知見を統合し、質の高いケア提供の実現に寄与する実践モデルの構築をすすめていく。

E. 健康危険情報

なし

F. 研究発表

1. 論文発表

1) 介護福祉士実践能力尺度の開発～回復期リハビリテーション病棟版～

○サブレ森田さゆり 厚生の指標. 72(7):1-7.2025.

2) 看護師が介護福祉士と連携・協働するためのアクションリサーチ-Relational coordination 理論を用いたデイパートナーシップによる介入-

○サブレ森田さゆり 雑誌医療. 79(4-6):191-197.2025.

2. 学会発表

1) 回復期リハビリ病棟における介護福祉士の専門性に関する文献検討

○栗山恵美 第79回国立病院医学会 2025年11月

2) 「人生100年これからゲーム」を利用したACP導入支援に関するパイロットスタディ

○笠松里佳子 松浦悠子 岩下彩 宮本彩香 斎藤祐輔 後藤文宏 木ノ下智康 瀬瀬伸子 近藤和泉

第30回日本老年看護学会学術集会 2025年6月29日 幕張

4) 人生100年これからゲーム（ACPカードゲーム）を通じた本人の意思表示を叶えられなかった1例

○斎藤祐輔 松浦悠子 岩下彩 笠松里佳子 宮本彩香 瀬瀬伸子 木ノ下智康 村上正治 佐竹昭介

第36回老年医学会 東海地方会 2025年10月4日 名古屋

G. 知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし